

## 『神に近づこう』

ヘブル人への手紙 10 章 19～39 節

本日は、10 章 19 節以降の後半部分を学んでいきます。キリストを信じる者たちがどう歩むべきかを、著者は四つの点を挙げて具体的に指示します。知識は行動に移された時に初めて意義を持つこと、教理は生活とならなければならないことが具体的に説明されています。

## 1. 神に近づけ (19～22 節)

第一は「神に近づけ」との勧告です。すべての罪が赦され、良心がきよめられたのですから、大胆にまことの聖所に入り、神と交わりを持つことが必要です。また、同じ信仰を持つ者たちが交わり、支え合うことも必要です。

19～20 節に「**こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。**」とあります。イエス様は、すべての人に至聖所すなわち救いへの道を開かれました。イエス様は、すべての人のすべての罪を帳消しにしてくださったのです。ですから、イエス様の血によって真の聖所に入ることができるように、すべてが用意されているのですから、22 節で「**全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。**」と語っています。神に近づく道を開くために、大きな代価が払われたことが、今まで学んだところで明らかです。十字架で神の御子が流された血、イエス様が身をもって切り開かれた道、成し遂げられたわざの一つ一つを思うとき、私たちはただただ礼拝と感謝の思いをもって神の御前に近づくほかありません。そして「**真心から神に近づこうではありませんか。**」と呼びかけています。私たちが神の御前に近づくとき、一番期待されていることは、儀式による外側のきよめではなく、詩篇 51 篇 17 節に「**神へのいけにえは砕かれた霊。打たれ砕かれた心。神よあなたはそれを蔑まれません。**」とあるように純真で真実な砕かれたたましいです。

## 2. 堅忍 (23～25 節)

第二に「堅忍」です。三つの互いに関連し合っている奨励が、語られています。

## ① 希望を告白する

キリスト者が神に大胆な信頼を寄せることができるのは、その信頼が他ならぬ神の約束に基づくものだからです。23 節に「**約束してくださった方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白し続けようではありませんか。**」神は信頼できるお方です。それゆえ神の約束も信頼できるものです。

## ② 互いに注意を払う

「**また、愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。**」キリスト者であるということは自分のためばかりでなく、他の人のためでもあることを忘れてはいけません。「勧め合い」の具体例として、互いに励まし合って集会を守ることが指摘されています。

## ③ 励まし合う

25 節に「**ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。**」とありますが、ヘブル人への手紙は教会の集まり（礼拝）に参加するのを軽んじないように警告しています。おそらくこの警告の背景にはキリスト者たちが迫害にあっていたことか、あるいは自堕落な信仰生活を送っていたことが関係しているものと思われます。これは教会生活を軽視しがちな今日のキリスト者たちにとっても必要な警告です。ですから、キリスト者たちは信仰の戦いにおいて互いに支え合わなければなりません。

「**その日**」とは、キリストの再臨の日のことです。初代のキリスト者は、いつもこの再臨待望の中に生きていました。

### 3. 確信を投げ捨てるな (26～35 節)

第三は「**確信を投げ捨てるな**」との激励です。背信者たちと、信仰の戦いを勝ち抜いた人たちとの両面から、この勧めが語られています。

#### ① 警告

「**罪にとどまり続けるな**」との警告です。このように素晴らしい真理の知識を受けた後、進んで罪にとどまり続けるなら、神の裁きを恐れながら待つしかありません。「**生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。**」(31 節) ヘブル人への手紙は、6 章でキリスト教信仰を捨てる危険について扱った後 (1～8 節)、すぐそれに続いてキリスト教信仰を守る重要性についても述べています (9～12 節)。今扱っている 10 章でもそれと同じやり方で 26～31 節は警戒すべき否定的な例について、32～36 節は勇気を与えてくれる肯定的な例について挙げています。これは福音のメッセージを聴く人々の魂の癒しのためにも大切なことです。

26～27 節に「**もし私たちが、真理の知識を受けた後、進んで罪にとどまり続けるなら、もはや罪のきよめのためにはいけにえは残されておらず、ただ、さばきと、逆らう者たちを焼き尽くす激しい火を、恐れながら待つしかありません。**」とあります。罪に落ち込んだことのある多くのキリスト者は、この箇所を読んで心の動揺を覚えるのではないのでしょうか。「信仰者として犯してしまった罪はもはや帳消しにされない」とこの節は教えているかのようにも読めるからです。しかし、このような解釈は新約聖書の教えに反するものです。ヘブル人への手紙もそのようなことを言いたかったわけではありません。

どのような罪についてヘブル人への手紙は述べているのでしょうか。それは信仰を捨てる罪についてです (39 節)。この罪は信仰者の集まりを軽んじるといった小さなことから始まる場合があります (25 節)。しかしこの罪を行いつづける人は最終的にはキリスト教信仰の反対者に豹変してしまうことがあるのです (29 節)。

当時、三つの具体的問題が発生しました。

第一は、「**モーセの律法を拒否する者**」(28 節) で、神の真理の否定することです。

第二は、「**神の御子を踏みつけ**」(29 節) することです。かつてキリストを神の御子と信じ、キリストの贖罪の業に頼っていたが、今では十字架の血を「汚れたもの」と見なすまでに変わってしまったのです。

第三は、「**恵みの御霊を侮る者**」のことです。何が正しく、何が誤りであるかを私たちに教え、罪に陥りそうになる時は注意を促し、無気力になる時に力を与えるのは、他でもなくこの恵みの御霊です。この御霊の導きや励まし、訴え、招き、命令、警告を無視し、自分勝手な生活をする者は、御霊を侮り、悲しませるものであって、そこには祝福の生活は決して生まれて来ません。

天の御国への唯一の道は、イエス・キリストによる救いの道です。天国へ通じる他の道は存在しません。この道を教えるキリスト教会を捨てるということは、天国には行けなくなるということです (27 節)。ユダヤ人たちには、まさにこの通りのことが起きてしまいました。

旧約聖書の律法では次の五つの罪に対して死刑の宣告が下されました。

- 1) 神様に対する侮辱 (レビ記 24 章 14～16 節)
- 2) 偶像礼拝 (申命記 17 章 2～7 節)
- 3) 偽預言者としての活動 (申命記 18 章 20 節)
- 4) 姦淫 (申命記 22 章 22～29 節)
- 5) 殺人 (レビ記 24 章 17 節)

死刑の宣告の大部分は神とその意思に反する罪という宗教的な理由から下されました。28～29 節に「**モーセの律法を拒否する者は、二人または三人の証人のことばに基づいて、あわれみを受けることなく死ぬことになります。まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものと見なし、恵みの御霊を侮る者は、い**

かに重い処罰に値するかが分かるでしょう。」とあります。律法は神に由来するものですが、人間の側でそれを否定する場合もあります。そのことをこの箇所は示唆しています。神に由来する救いを否定する者すなわちイエス様による罪からの贖いの御業が自分のためのものでもあることを認めない者は、他の人々よりもはるかに厳しい罰を受けることになります。

イエス様は、聖霊に対する罪について「ですから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒すも赦していただけますが、御霊に対する冒瀆は赦されません。また、人の子に逆らうことばを口にする者でも赦されます。しかし、聖霊に逆らうことを言う者は、この世でも次に来る世でも赦されません。」(マタイの福音書 12 章 31～32 節)と述べられたまさにこのことを意味しておられたのでしょう。

マタイの福音書 18 章 18 節では、「まことに、あなたがたに言います。何でもあなたがたが地上でつなぐことは天でもつなぐれ、何でもあなたがたが地上で解くことは天でも解かれます。」とキリスト者の健全な信仰の成長を見守る立場にある者は、罪を悔い改めようとしないうる者をその罪の中に縛りつける権能があると述べています。悔い改めて罪を捨てるという意思をもたない人は、罪を本当に自覚しているとは言えないし、罪の赦しを心から求めてもいません。それゆえ実際には、そのような人は、自分で自分を罪の赦しの恵みの外に閉じ込めてしまうことになるのです。神の恵みは人々の足蹴にされるような安っぽいものでは断じてありません。

## ② 奨励

信仰の勇者たちを思い出す必要があります。当時のキリスト者は迫害を受け、財産を奪われるようなことがあったと思われます。信仰の勇者たちは、数々の信仰の恵みと実とを証しました。

第一に、彼らは「嘲られ、苦しい目にあわされ、見せ物にされたこともあれば、このような目にあつた人たちの同志となったこともあります。」人は自分に益と栄誉をもたらすものを「友人」と呼びたがります。しかし、初代のキリスト者たちは、主にある聖徒の交わりがなんであるかを知っていたので、進んで逆境と不遇の中にある者たちの相談相手となり、彼らの仲間となりました。

第二に、34 節前半に「あなたがたは、牢につながれている人々と苦しみをとみにし、また、自分たちにはもっとすぐれた、いつまでも残る財産があることを知っていたので、自分の財産が奪われても、それを喜んで受け入れました。」とあるように、捕えられている人々への暖かい思いやりを忘れませんでした。

第三に、34 節後半に「また、自分たちにはもっとすぐれた、いつまでも残る財産があることを知っていたので、自分の財産が奪われても、それを喜んで受け入れました。」とあるように、財産奪われても喜んで忍び通しました。

第四に、天の報いの約束を信じて、確信を持ち続けました。「もうしばらくすれば、来たるべき方が来られる。」から、忍耐して信じ続けよと励まされています。現在の私たちには、当時のような迫害はありません。しかし迫害より恐ろしいのは、恵みに慣れることです。ご自分の命を犠牲とまでしてまでも私たちを愛してくださった主の恵みを、当然のように思うことです。私たちはもっと感動すべきではないでしょうか。そうでないと、神に近づくこともなく、罪を繰り返しても平然とふるまい、主の来臨を待ち望むことがなくなってしまうのです。

32～36 節に「あなたがたは、光に照らされた後で苦難との厳しい戦いに耐えた、初めの日々を思い起こしなさい。嘲られ、苦しい目にあわされ、見せ物にされたこともあれば、このような目にあつた人たちの同志となったこともあります。あなたがたは、牢につながれている人々と苦しみをとみにし、また、自分たちにはもっとすぐれた、いつまでも残る財産があることを知っていたので、自分の財産が奪われても、それを喜んで受け入れました。ですから、あなたがたの確信を投げ捨ててはいけません。その確信には大きな報いがあります。あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは、忍耐です。」とあります。この箇所執筆者は手紙の受け取り手たちに対して今まで彼らがどのような目にあってきたかを思い起こさせようとしています。彼らもまた迫害を受けてきたのです。帝国による公的な迫害ではキリスト者たちの財産も没収されてしまいました。



#### 4. 目標を目指し走ろう

過去の迫害と試練、現在の背教、未来に対する不安の中で、キリスト者に求められるものは、「忍耐」であり、終わりの日を目指して信仰の道程を完走することです。

奨励は、37～38 節の「**もうしばらくすれば、来たるべき方が来られる。遅れることはない。わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。**」と主の御言葉をもって結ばれています。キリスト者たちが迫害されることについてヘブル人への手紙は、イエス様が御自分に属する者たちへの迫害を予言されたことによってではなく、これまでと同じく旧約聖書の引用によって説明しています。引用箇所はハバクク書 2 章 3～4 節からです。預言者ハバククは不義がこの世でまかり通っている有様を嘆きます（ハバクク書 1 章 2～4 節）。それに対して神は預言者ハバククに忍耐を促します。神は御自分の計画に基づいて意思を実現していかれるからです。

ハバククは、たとえ敵が押し寄せ、持っているものをすべて奪って行ったとしても、義人は信仰によって生きると宣言しました。神はどんな状況にあっても、信仰に立って生きる者を喜ばれます。信仰は苦難の中にあっても屈せず、天の希望を見上げさせます。キリスト者の歩みを勝利させるのはこの世の力や権力ではありません。ただ主が与えてくださる信仰なのです。信仰によって生きるなら、どんな時にも勝利することができます。神は真実な方であって、約束されたことを必ず実現してくださる方だからです。ですから、信仰によって生きるなら、やがて大きな祝福を受けることになるのです。

あなたは何によって生きているでしょうか。何に目を留めていますか。いつまでも残るものを見ているでしょうか。どうかあなたの確信を投げ捨てないでください。最初の確信を終わりまでしっかりと保ちましょう。あなたがたが神の御心を行って、約束したものを手に入れるために必要なのは忍耐なのです。この手紙を受け取った人々もイエス様の再臨をいつまでも待ち続けなければいけないことに疲れてきていました。信仰を捨ててしまう危険に彼らの多くは直面し始めていたのです。このような状態にいたキリスト者たちにとって、同じように忍耐が切れかかっていた預言者ハバククに対して与えられた予言は深く共感できるものでした。「**信仰を捨てる者は滅びてしまう。だから棄教する理由は何もない。それに対して忠実に信仰の中に留まる者たちは救われる**」という予言です。あたかもこのことを実例に基づいて証明するかのようにして次章では神に従い続けた過去の人物たちの信仰の戦いの数々が取り上げられていきます。

このように、神に近づく新しい方法が確立され、実際にそれが有効となったのだから、まず、22 節、信仰を持って、神に近づこうではないか、と問いかけます。以降、著者は、人が神に近づけることは確実なのだから、信仰を持って、これこれのことをしよう、と矢継ぎ早に、たくさんの勧めをしています。

24 節、やはり社会に正義と平和をもたらす神に近づいて生きるのですから、「**愛と善行を促しあいましょう**」と言います。また、神を礼拝する者として、集会は休まないようにしましょう、と言います。というのも実際的な意味で神にお会いする日、終末の日は近づいているのですから、というわけです。

26～31 節、イエス様にある罪の赦しの恵みをないがしろにしないようにしましょう。十字架の苦しみによって、私たちの罪が赦された、一人のいのちが犠牲にされたことの意味は大きいのです。罪の赦しの恵みを大事にし、もはや罪を犯さないようにしましょう、と言います。

34 節、また、主にあって苦しんだ日々を忘れず、同じように苦しめられている人々に思いやりを持ちましょう、と言います。確かに信仰は、自分の救いだけの話しではありません。全ての人が救われるための祈りを必要とするのです。また何事も忍耐。忍耐を持って、神の救いの完成を待ち望みましょう、と言います。私たちは臆病者ではなく、神を信じる者、神のいのちに生きる者です、と。信仰に生きるというのは実に前向きなことです。人として実を結ぶような生き方をすることではないでしょうか。私たちも、終わりの日を目指して、与えられた道を走り通しましょう。